

山口敏子 議員

清流クラブ

市民がより利用しやすい きんちゃんバス停の設定を

問

(1) 今までに地域公共交通活性化会議で何度も協議を重ねられ、直近では、25年10月にダイヤ・ルート及び停留所なども改正され市内を3ルートのきんちゃんバスが走行している。福祉センターを基点に海南病院、市役所、弥富駅を巡回するよう考えられ、市内の医療機関、海南病院への通院の足として、また、市役所、買い物、福祉センター、いこいの里への利用の足として定着し走行している。市としては不公平になっ

(2) バス停「くわしん弥富支店」は、3ルートのバスが全部走行しているのに北ルートのみ停車し、他の2ルートは通過してしまう。このバス停付近は、住宅も多いので、イオンや福祉センターや駅にも行けるように全てのルートが停車するよう配慮はできないか。

(3) 公共交通といっても、多くの市民が利用してこそきんちゃんバスと考える。住宅地が多くあるにもかかわらず、バス停の間隔がかなり広い地区がある。市内で最も人口の多い平島地区は道路も広く整備され

ているのに、バス停の設置数が少ないと思う。市民の大切な足として、バス停を整備すれば、より多くの利用があると思う。

今後、昼間の時間限定でも良いので、バス停の増設を考えることはできないか。

市民がより利用しやすい バス停の設置に努める

答

総務部長

(1) きんちゃんバスは、11年4月に巡回福祉バスとして事業を開始して、22年6月から地域公共交通活性化・再生総合事業の計画事業として実証運行を始め、24年4月より本格運行に移した。

バス停の設定については、巡回福祉バスの際に利用が多かった箇所や、公共施設・病院などの市内主要箇所を公安委員会や道路管理者とも協議をし、安全面についても考慮して設置をしている。

(2) バス停へ全ルートのバスを停車させることについ

ては、今後、地域公共交通活性化協議会において協議していききたい。

(3) 運行業務を委託する事業者への委託料が増額とならない範囲内で、市民アンケート結果や市民の御意見を検討して、より利用していただきやすいバス停の設置に努めていく。

特定健康診査に採血による がん診断の導入を

問

国立がん研究センターと新エネルギー・産業技術総合開発機構で、1回の採血で13種類のがんが発見できる診断システムの開発に着手したと発表があった。血液中に含まれるマイクロRNA【】という物質が、病気によって血液中に分泌される種類と量が変化することがわかってきたようである。

今回発表されたマイクロRNA検査は、早期の段階で1回の採血でがんを調べられる。この検査方法が確立された場合には早急に取

り入れていただきたい。できれば、マイクロRNA検査と特定健康診査をセットに導入してはどうか。



血液や唾液、尿などの体液に含まれる22塩基程度の小さなRNAのこと。近年の研究で、がんなどの疾患に伴い患者の血液中でその種類や量が変動することが明らかになっている。さらに、こうした血液中のマイクロRNA量は、抗がん剤の感受性の変化や転移、がんの消失などの病態の変化に相關するため、全く新しい疾患マーカーとして期待されている。

確立した段階で関係機関と協議 しながら取り入れていきたい

答

民生部長

本市としては、この画期的な採血によるがんの診断システムが実用化される段階になれば検討していく。特定健康診査での導入について、海部地区の関係市町村や海部医師会などの協議が必要になってくるが、確立した段階で協議して取り入れていきたい。